潮騒

第21号
平成18年
1月1日

財団法人 日本殉職船員顕彰会
〒102-0083 東京都千代田区麹町四-五 海事センタービル
電話 〇三-三二三四-〇六六二
FAX 〇三-三二三四-〇六八二

年頭のご挨拶

財団法人　日本殉職船員顕彰会
会長　相浦紀一郎

あけましておめでとうございます。

皆様におかれましては、さわやかな新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

戦没船員の碑　終戦記念日献花

旧年中、賛助会員および協賛会員ならびに関係者の皆様には、当会の事業運営に多大のご支援ご協力を賜り、お陰さまをもちまして事業も滞りなく実施できましたことを、年頭に当たり改めて厚く御礼申し上げます。

昨年は終戦六十周年という節目の年であり、当会にとりましても例年の戦没殉職船員追悼式に加え、天皇皇后両陛下をお招きした終戦六十周年記念「戦没殉職船員遺族の集い」、両陛下と紀宮さまによる「戦没船員の碑」へのご供花と、意義深い年となりました。改めて会員皆様のご協力とご理解に感謝いたします。

申し上げるまでもなく戦没船員のご遺族は高齢化し、お子さん・ご兄弟・お孫さんへと世代の変化が見られます。そうした中で戦争の記憶は風化し、ややもすればあの悲惨な戦争によって祖国のために犠牲となられた戦没船員への思いも薄れようとしています。私達は、二度とあのような戦争を繰り返さないためにも、犠牲となられた六万余人の戦没船員への慰霊、顕彰事業の重要性を痛感する次第です。

今後の経済、社会環境は厳しく、当会の事業運営も極めて困難な状況になると考えられますが、今年は、決意も新たに戦没殉職船員の慰霊顕彰という事業の炬火をたやすことなく、横須賀観音崎の地に「海洋の永遠の平和」を高く掲げるとともに、戦後わが国の復興を支えてきた海運・水産業のなかで、不幸にして海難や労働災害にあわれ殉職された船員ご遺族の援護に一層の努力を続けて参る所存でございます。何卒変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に本年が皆様にとりまして実り多い一年となりますよう祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

開催会場案内図

交通案内
JR中央本線「大曽根」駅乗換、地下鉄名城線「ナゴヤドーム前矢田」駅下車徒歩3分

戦時徴用船遭難の記録画展
相談コーナービデオ放映も

1月名古屋で開催

今年の記録画展は一月二十四日から二十九日まで、名古屋市民ギャラリー矢田（名古屋市東区）で開催します。

この記録画は、大阪商船の嘱託船舶画家大久保一郎氏（故人）が、当時の岡田社長から、失われゆく船舶の記録を残すよう指示され、戦時中の厳しい軍機保護法下にあって、生還乗組員の生々しい証言をもとに、戦時遭難船の記録画をひそかに描き残したものです。絵画は三十号油彩画三十七点。これらの絵画は、今日では太平洋戦争で軍人をはるかに上回る犠牲となった戦没船員やその殆んどが壊滅した船舶の実相を伝える数少ない貴重な記録となっています。

戦時徴用船遭難の記録画展開催の目的は、このような実相を広く国民に知ってもらい、二度と戦争のない世界の平和に貢献することです。さらにもうひとつは、ご遺族や関係船員で、今なお多くの方々に慰霊・追悼事業をお知らせ出来ずにいるため、このような催しを通して周知していくことにあります。

これまで三十回の開催で、多くのご遺族等関係者に周知でき、当会の参考資料などをお渡しすることが出来ました。

感激「遺族の集い」

戦後六十年　参加者の声

昨年七月四日天皇皇后両陛下の行幸啓を賜り、東京都永田町の海運ビルで、「終戦六十周年記念戦没殉職船員遺族の集い」が、ご遺族、北側一雄国土交通大臣、根本二郎日本海事広報協会会長、鈴木邦雄日本船主協会会長、井出本榮全日本海員組合組合長など海事関係者約四百人が参加して行われた。

両陛下は約四十分間にわたり遺族とのご懇談をされた。両陛下とお会いできた印象、戦後六十年の想い、遺族の集いの感想など、会場での声と、後日お寄せいただいた感想文・お礼状の一部を紹介する。

両陛下ご入場前の懇談会場

神奈川県　大竹キミさん

「天皇皇后両陛下にお会いできて胸がいっぱいです。今回の集いは冥途のみやげになり、安心して主人のそばに行けます。戦後六十年長かった気もします。後々のためにもこのような機会をこれからも作って頂きたい」と兼俵伸枝さんが

左・大竹きみさん、右・兼俵伸枝さん

お母さんに代わり語る。

大竹さんのご主人は日本郵船鎌倉丸にて昭和十八年四月二十八日戦没、大竹さんは九十六歳のご高齢で娘さんの兼俵伸枝さんが同行参加した。

三重県　大森久子さん

「天皇陛下とは直接お話ししませんでしたが、両陛下のお出迎えに行かれた木村静香さんが会話されているのをそばで聞きとても感激でした。お会いできたことだけでも幸せです。早いものであれから六十年が過ぎました。高齢になり東京まで来るのは大変でしたが三重県から一人できました」と語り、両陛下にお会いしたいその気持ちが伝わるようであった。

大森久子さん

弟さんは山下汽船高津丸にて昭和十九年十一月十日戦没されている。

東京都　静友己枝さん

「戦後生れの私たちですが、天皇陛下のお話を伺い、遺族の心を受け止めこのような集いにご臨席していただけることは非常にありがたいです。陛下は『日本郵船の龍田丸ですね』と話され、自分の叔父であることをお伝えした。戦後六十年、日本が通り抜けた団塊の世代、怒涛の波にのっていたと感じ、先人たちが作った道を、私たちはそのレールの上を走っていると思う。今回の集いはグループに分けて、同じ船、同じ会社の遺族の方がたと懇談でき、非常に有意義でした」。同席した齋藤悦子さん（横浜市、日本郵船太明丸）は「私も同感でグループに分けてあり、同じ会社遺族の方と打ち解けることができとても良かったです」と語る。

静友己枝さん

兵庫県　太田敏子さん
埼玉県　清水清子さん

お二人は賀茂丸（日本郵船）に乗船していた戦没船員の遺族の方で「天皇陛下はテレビにお写りになるより、ふくよかで若く感じられとてもすてきでした。皇后様はきれいでしたね。両陛下にお会いできて幸せです」と語る。また、太田敏子さんは、「父の当時の写真など一枚もないのでどなたかお持ちの方はおりませんかね」と話していた。

右・太田敏子さん
左・清水清子さん

※　加茂丸は総トン数七九五四トン、昭和十九年六月三十日朝六時、基隆発、門司港向け航行中、七月三日二十三時頃五島列島富江南南西十六キロ付近において、右舷三番倉に魚雷三発を受け、大爆発と共に船体が右舷に傾き船首から沈下、二十三時〇八分全没。当時船客五二六名と砂糖雑貨計七五七〇トンを搭載中で、遭難により四百十五名、備砲隊三名、警戒隊七名、船員七十四名、計四九九名が戦死した。

天皇皇后両陛下ご懇談

遺族の集い・感想文集から

悲しみを乗り越えて

神奈川県　的場貞子

過日、七月四日両陛下をお迎えしての戦没殉職船員遺族の集いお招きを頂き有難うございました。早速お礼状を差し上げるべき所少々右肩を痛め今日となってしまいました。

当日雨にもかかわらず両陛下共々ご機嫌よくご臨席賜り、私は幸運にも皇后様とお言葉を交わす光栄に浴しました。

お優しいお声で「お母様はおいくつでお亡くなりになりましたか？」「ご苦労なさった事でしょう」と仰有って頂きました。本当に母にこそかけて頂きたいお言葉でございました。父、母のお陰をもって私が有難いお言葉を頂く事が出来たと改めて父母への思いを深めている所でございます。

当日は顕彰会の方々にもお心のこもったおもてなしを頂き感謝いたしております。その後も写真やら潮騒やら新聞などもお送り頂き嬉しく思っております。今後もこの会の為にご盡力を頂ければと願っております。

まだまだ厳しいお暑さがつづくと思います、どうぞお体お大事にお励み下さいませ。

両陛下にご挨拶する相浦会長・北側国土交通大臣

新潟県　水野　孝子

平成十七年七月四日の集いは天皇、皇后両陛下のご臨席を賜り大変有難く思いました。雨の中のお出ましでした。終始にこやかで長時間お立ちになられたまま遺族一人一人に話しかけて下さりその真摯なお心づかいには感動致しました。両陛下もお年を重ねられたことですしお疲れを心配致しました。皇后様よりおもいがけず母のことをお尋ね頂きびっくりいたしました。はじめてお近くにお目もじ致した皇后様の美しさにお写真以上と思いました。

主催の方々は会長相浦紀一郎様の話は心がこもり迫力がありました。その他の方々様も丁寧な態度でおもてなし下さりました。父の所属船会社のOBの方のおもてなしには懐かしさを感じ有難く思いました。温もりのある集いでした。父はこの様な方々様とかかわりのある仕事をしていたのかとまわりをそっと拝察致しておりました。母と一生懸命生きてその母を十年前八十二歳で見送って少し休息しましたら終戦六十周年でした。遺族の集いは、はじめての出席でした。上京をまえにパソコンにて三十回目の年に陛下よりこの会に賜ったお言葉を拝見して来ました。

「・・碑の前に広がる果てしない海に抱いたであろうあこがれとその海が不幸にもその人々が痛ましい最期を遂げた場所となった・・」

父はこのお言葉の通りと思いました。母と私は共に年を重ねた人生だったはずでしたが亡くなる最後の年に「あなたが私を本当によく面倒をみてくれてるのは解るのだけれど・・どこか心の中が空しいのだよね・・」と申しました。これが夫を失った母の本心だったのだと思いました。

七月四日は父母それぞれの人生を考え、又、終戦から六十年も時が経れば遺族さえ全て亡くなったかもしれない戦没者の方も居られるのではと考えさせられた日でした。

顕彰会様および関係者の方々様が毎年毎年かくも立派に「戦没殉職船員」の追悼式典を執り行って下さいます事実に接しまして、心より厚く厚く御礼を申し上げる次第です。本当に有難く思っております。

大阪府　堀　桂子

この度、戦没殉職船員遺族の集いをしていただき有り難うございました。お世話をされた方々は大変だった事と存じます。

天皇皇后両陛下に御臨席を賜り一人一人お言葉をいただき感銘致し自然に涙が出ました。亡き父もさぞ喜んでいる事と信じます。これで私の戦後も終わりました。又、先日は写真をお送り戴きよき記念品として大切に保存させていただきます。

本当に有り難うございました。暑い毎日です。御皆々様くれぐれも御自愛下さいませ。

鳥取県　山崎　忠丸

先般の「終戦六十周年記念戦没殉職船員遺族の集い」には大変お世話になりまして誠に有り難う御座いました。

思いますに我々一般の庶民が畏れ多くも天皇皇后両陛下におめにかかり、その上懇談までさせて戴けました事は、本当に生涯の良き思い出となり、会長様はじめ関係者各位の御高配の賜と心から厚く厚く御礼申し上げる次第で御座います。

又、あれだけ多数の遺族の方々にこのような御礼文と貴重な写真を送って戴くなど、さぞかし大変な御苦労な事だったと存じます。

まさか天皇皇后両陛下御臨席の御写真を手にする事など思っても居りませんでした。重ね重ね感謝申し上げます。

尚、来年五月の慰霊祭には是非出席させて戴きたく思って居りますので何卒宜しくお願い申し上げます。貴会の益々の御発展を御祈り申し上げます。

石川県　山岸　由紀子

私、天皇陛下に、大阪商船に勤めておりました叔父が、軍用船に乗って戦死し、今日出席したこと、私の父ともう一人の伯父が中国で戦死したことをお話し、中国へは、遺児による友好親善事業で平成四年に参加し供養してきたこと、そして、今日陛下と身近でお話し出来て、胸が一杯で感無量です。

ご入場・ご歓迎される皇后陛下

亡くなった父たちが今日呼んでくれたのではないかと思います。と感謝のことばを述べさせていただきました。

陛下より、暖かい眼差しで、三人戦死したことに対し「残念なことでした」戦地へ供養してきたこと、今日お会いできたことに対し「それは良かったですね」とお言葉を頂き感謝、感激で「今日は、本当に有難うございました」と頭が垂れ下がりました。

そして、今まで喉につかえていたものがすーと取れ、体が軽くなったような気になり、今まで経験したことのない気持ちになりました。

帰りの電車の中で、今日の出来事、夢ではなかったか、でも現実のことだったのだ。と雲の上の存在の陛下と身近にしかも日常と変わらない言葉でお話出来たこと、陛下のやさしい話しかけ暖かい眼差しが脳裏に焼き付いており、一生忘れない経験をさせてもらったこと、今日という集いを実行されました関係者の皆様に感謝せずにはいられません。

終戦六十年たちますが、戦争後の苦しみ、戦死した方々への思いは忘れることはありませんが、いつまでも過去を引きずっていても駄目だと思います。国のため、家族のため、国に殉じた戦没者の気持ちを引き継ぎ、これらの国、世の中のことを皆で真剣に考える時ではないでしょうか。今の世の中あまりにも目に余ることが多いです。家族のこと、国のこと、他人を思い遣るやさしい気持ちが大切ではないかと思います。そして、戦没者の礎で今日があることに感謝し、平和な世の中が続くことを祈っております。

以上、集いに参加させて頂き、陛下と心おきなくお話できたことに感謝し、関係者の皆様にお礼を申し上げたく、拙い文章ですが、一筆走らせました。

千葉県　水野　孝

前略　ご免ください

先日は「戦没殉職船員遺族の集い」にお招きいただき、誠に有難うございました。当日は朝からあいにくの雨に見舞われましたが、天皇皇后両陛下がお出ましになられるとあって、その日は朝から高ぶる気持ちを抑えることはできませんでした。

こうしてご遺族の方々と一緒に両陛下をお迎えする私は、僅か数秒の差で生き残っただけに、一瞬にして無と化した先輩・同僚乗組員に顔向けもできない気持ちで、毎年八月十五日に靖国神社へぬかずいてきました。しかし、この日はその私が亡き乗組員とともに両陛下をお迎えするという意識がありました。彼等に対する引け目がこの日は消えていたようでした。

やがて両陛下のご到着が告げられ、拍手が鳴り響く中をごゆっくりと会場内にお姿をお見せになられた両陛下を間近にしたとき、感動のあまり予想もしなかった涙がこみ上げてきました。それは「嬉しい」といった気持ち、そして「有難い」といった気持ち、そして「もったいない」といった気持ちが入り混じったような感じでした。サイパン島ご訪問からお帰りになり、休む間もなく雨の中をこちらの集いにご臨席頂いたことを思うとき、いっそう胸の詰まる思いがいたしました。

献杯のあと、ご退場されるまでの約四十分間、遺族一人ひとりとご懇談されておられるそのお姿を拝見していると、ご公務とはいえたいへんな激務に携わっておられることが痛いほどよく分かりました。こうして両陛下の亡き乗組員やその遺族に対する御心の深いお姿に接したとき、誰しもが限りない心の癒しと慰めを覚えたのではないでしょうか。

ご退出された両陛下のお姿を追うように、しばしの間拍手は鳴りやみませんでした。ご来場のときと変わらぬ微笑みは両陛下のお人柄そのままに、いつまでも心に残る貴重な思い出となることでしょう。

主催者である顕彰会の皆様、ほんとうにご苦労様でした。

心から感謝申し上げます。どうも有難うございました。

投稿

涛哭

戦後六十年、或る追悼の記

東京都　塩田　顕一

現役時代最後の頃

海はいい。春夏秋冬、季毎の風情こそ変われ、いつどこで眺める海も多彩な情感を抱かせずには措かない。私にとってその原点は生まれ育った故郷の照島にある。

私の小中学校時代の後輩で、長流短歌会で名を成した歌人、故石田耕三君の歌集「吹上浜」に収録されている「弓なりの吹上浜の尽きるところわがふるさとは月夜潮騒」は静かで穏やかな夕暮れ時の照島のたたずまいを懐かしんで詠んだ彼の代表作の一つである。

照島は薩摩半島の東シナ海側を南北に走る白砂青松の吹上浜の最北端に横たわり、曾ては遠洋マグロ漁業の基地として活況を呈した串木野市島平港の天与の防波堤ともなっている周り七百メートルほどの小島である。

照島の一角には「慶長三年冬、遥かに風涛を越え我らが開祖この地に上陸す。」と銘記された石碑が建っている。これは薩摩焼宗家十四代の沈寿官氏の書であって、豊臣秀吉の慶長の役で朝鮮半島から連行された刀工達が初めて日本の地を踏んだのが他ならぬこの照島であった。

しかし、太平洋戦争が終わってから後、いつどこで海を眺める機会があっても、都度私の胸に蘇る照島の残照は、鹿児島八景の一つといわれるその美景でもなければ、秀吉にまで遡る史実でもない。それは昭和十八年の初夏、すでに南方の戦線では日々戦雲急を告げつつあったとはいえ、島平港を拠点に遠洋漁業を懸命に守ってまさに善良な漁民数十名が、突然舞い込んだ召集令状で漁船もろとも南方戦線に駆り出され、村の鎮守照島神社への祈願も空しく全員が名も知れぬ南海の戦場で散華し、ただ一人も二度と故郷に帰らなかったという冷厳苛酷な事実である。

照島を神社への参道から望む、左下砂浜は吹上浜

これらの漁民の中には、当時まだ十五、六歳でほとんどが「かしき」（炊事番）として乗船していた照島小学校時代の私の同級生四名も含まれていた。

その時の漁船数隻で編成されたにわか作りの船団の団長に擬せられたのは、当時の我が家の持船の中の一隻「金宝丸」の船長をしていた私の長兄秀郎であった。弱冠二十三歳の独身の兄は、すでに日本海軍が前年のガダルカナル島の大敗を転機に敗走に次ぐ敗走を重ねているという南方海域の厳しい戦局など知る由もなく、曾つて、一度も軍事訓練を受けたこともない老若入り混じった船員たちをひたすら鼓舞しながら陸軍船舶隊終結地の宇品港に向かったのである。

いよいよ島平港から船出する日、その日はまさに天気晴朗なれど波高し。が、どの船も勇躍然と万漁旗をなびかせて、先ずは照島の沖合間近を就航しながら村の鎮守に武運を祈ってから、船首を薩摩半島南端の野間岬に向けて出帆したのであった。

将来を誓い合ったばかりの兄の許婚者が照島の松陰で遠慮がちに忍び泣きしながらいつまでも船影を追いかけているその傍で、私は、精一杯漁船団の武運長久を祈っていたが、これが私と兄の永遠の別れとなった。そして、いつまでも鮮烈に蘇るこの日の思い出こそ私が戦後一貫して不戦・絶対平和の主義主張を頑なに堅持してきた背景に他ならない。

終戦の二年ほど後の昭和二十二年のある日突然送られてきた兄の戦死通報には、戦死の場所も日時も不明とあり、続いて送られてきた白木の箱には、誰の目にもどこかで拾い集められた石ころとしか映らない遺骨が納められていた。

日本史的にも世界史的にも激動を極め、戦争と科学の世紀と呼ばれた二十世紀の終わり、ミレニアムという区切りの年に、私も長く続いた会社勤務から開放されたので、それを機会にかねて気になりながらつい先送りしていた兄たちの戦死状況の調査に着手することとした。

兄たちを船もろとも徴用したのは陸軍の船舶隊だったということが私の脳裏に強くこびりついていたので、先ずは、その頃九段下の偕行社から分かれて靖国神社の裏門に「靖国偕行文庫室」として独立していた旧陸軍関係の調査広報室を訪ねてみた。

正規の軍人ならいざ知らず、急ごしらえの軍属のことなど所詮「詳細不明」の一言で片付けられはしないかと半ば

諦めていた私に、間違いなく兄たちのものと思われる記録が届いたのはそれから数日してのことだった。

それによれば、兄秀郎は昭和十九年六月にニューギニア方面のパマイ島で戦死し、昭和三十三年の四月に靖国神社に合祀されたことになっていた。

ただ腑に落ちなかったのは、階級欄にはいつどこで海軍に編入されたのか海軍嘱託とあり、最も肝心の戦死の場所「パマイ島」がいくら探しても地図のどこにも見当たらなかったことである。案の定というべきか、兄と命運を共にしたであろう漁船団員たちが、どのような戦況下で命を絶ったのかという、遺族なら一番知りたいと思う情報はかけらも記されていなかった。南方に向かう途次、台湾から葉書一枚を寄越した以外何一つ音信のなかった兄たちの消息は、恐らくこのまま永遠の闇に葬られることだろう。

戦後の海戦史等で世に知られるガダルカナル島もニューギニア近海のソロモン群島の中の一つである。時期的に見て兄たちがあのガ島の凄惨極まりない日米攻防戦に遭遇したのでないことだけは確かだが、その後の日本軍の連戦連敗の中で、焼玉エンジンの木造漁船で全く無防備のまま急遽戦場の海上輸送に駆り出されて行った兄たちのこと、最新鋭の科学兵器を駆使する米海軍の前になんらなす術もなく右往左往しながら島から島へと逃げ惑い、挙句の果ては文字どおり「撃つに弾無く、食うに糧無く」地獄絵の中で虫けらのように息絶えたのではないか、と私は戦後六十年を経た今もなお追憶のたびに断腸の思いを禁じ得ない。

慶長三年、朝鮮の陶工達が初渡来上陸した地として銘記の記念碑

数年に一度帰省して必ず訪れるのは照島である。島の先端には、その昔たまたま島を訪れた薩摩の殿様が「驪竜巌」と名づけたとされる奇岩が昔ながらの風情で横たわっている。眺望豊かなこの辺りは兄の船団で南海の藻屑と消えた四人の同級生たちとよく遊んだ思い出多い場所である。遠く長く連なる吹上浜の白砂青松と、どこまでも広大で清澄な東シナ海という恵まれた大自然を、みんなが我がもののように愛でながら育った私たちはよく大声で「われは海の子」を斉唱したものだ。何の屈託もない平和な日々に言いようもなく海に憧れた頃の少年時代が懐かしい。

今更ながら戦争とはなんと残酷で無慈悲なものか、他ならぬその海で訳も分からぬうちに死に追いやられた少年達のどこにもやり場のない無念の声は、今も変わることなく照島の奇岩に打ち寄せる濤の慟哭となって私の心を打つのである。

「戦争に征きて帰らぬ氏子らの声とも聞こゆ松の潮風」は先に書いた歌人石田君が照島の松籟に寄せて詠んだ追悼歌だが、私は帰省のたびに同じ思いで「濤哭」を聞いている。戦争はいついかなる理由であれ決してあってはならない。わが国憲法が世界の先陣を切って高く掲げている「不戦の旗」が、百年先、いや千年先であっても、いつの日か全人類が人種や宗教の違いはもとより政治体制や生活様式の違いまでも乗り越えて辿り着くであろう窮極の叡智によって、世界の隅々にまでひるがえる日の到来を心の底から願って止まない。

（あとがき）

この一文は、殊のほか教訓や示唆に富むといわれる昭和の戦中戦後を私が私なりに無我夢中で生きた六十余年の出来事を、ただひたすら子や孫に伝えるためにだけ、数年前に纏めたささやかな「自分史」の一部から抜書きしたものである。

私は戦後六十年という今年平成十七年八月の終戦記念日に偶然某新聞のコラム欄で初めて「日本殉職船員顕彰会」の存在を知り、早速、協賛会員への登録を願い出た上で、兄たちの更なる戦死状況の調査を依頼した。

快く引き受けていただいた同会からの報告は、本文で述べた「偕行文庫室」の調査内容をそれほど大きく出るものではなかったが、金宝丸乗組員のほぼ全員の氏名と戦没年月日が克明に記録されていて、懐かしい顔また顔が偲ばれて感慨一入であった。

かくて私は同会の機関紙「潮騒」にこの追悼記の掲載をお願いすることとしたが、それは、この小稿が同郷の戦没船員全員の供養の一端になればとの思いと、長く引きずってきた「我が家の戦後」にも一つの区切りになればとの思いからである。

平成十七年十一月九日

筆者略歴紹介

塩田顕一氏

鹿児島県いちき串木野市出身七十七歳、元三井石油化学（現三井化学）専務、元三井デュポンポリケミカル社長

天皇皇后両陛下ご供花

紀宮さまご同行　観音崎戦没船員の碑

天皇皇后両陛下は昨年十月十一日、清子内親王殿下をご同伴のうえ、神奈川県観音崎の「戦没船員の碑」にお立ち寄りになりご供花をされた。

風が少し吹きつつも雨が降らず恵まれた天候の中「戦没船員の碑」前には、相浦紀一郎日本殉職船員顕彰会会長、日本船主協会、全日本海員組合ほか関係代表者九名がご奉迎した。

ご供花される両陛下・紀宮さま

定刻十三時三十分に両陛下、紀宮さまが御着、相浦会長の先導により、「戦没船員の碑」前にお進みになり、天皇皇后両陛下と紀宮さまはそれぞれ白菊の花束をご供花された。

ご供花の後、両陛下と紀宮さまは御製碑、御歌碑、昭和天皇皇后両陛下行幸啓の記念碑をご覧になり、お帰りの際は九名の奉迎者一人ひとりに慰労のお言葉をおかけになった。

両陛下は七月四日、東京・平河町の海運ビルで開催された「戦後六十周年記念戦没殉職船員遺族の集い」にもご臨席、遺族とご懇談されている。

紀宮さまご同伴のご供花は、平成十二年九月にも行われているが、戦後六十年節目の年、戦没船員に御心を寄せられてのことと受け止められている。

両陛下ご供花の報道を聞き、かけつけた市民は、お帰りの際「皇后さまお元気で」「紀宮さまご結婚おめでとう」と声をかけ、両陛下と紀宮さまはいつまでも手をふりお応えになっていた。

天皇家の暖かい御心に想う

全国戦没・殉職船員遺族会
会長　堀田　明道

全国の戦没・殉職船員ご遺族の皆様、いかがお過ごしですか。戦後六十年を数える今年は、遺族にとっても特別な年となったようでございます。この七月四日にはご存知の通り（財）日本殉職船員顕彰会の主催で「終戦六十周年戦没殉職船員遺族の集い」が開かれ、天皇皇后両陛下のご来臨を賜り、遺族一同が両陛下とのご懇談に等しく感激に浸った事は記憶に新しいところでございます。

さらに私どもは思いがけず、この二ヶ月後の十月十一日に再び両陛下をお迎えする光栄に浴しました。

それは両陛下が紀宮清子内親王と葉山の御用邸でご静養の帰途、観音崎の「戦没船員の碑」にお参りのためお立ち寄り賜ったため、顕彰会首脳と遺族を加えた数名がお出迎えとお見送りを行った中に、遺族会会長として参列させて戴いたことによります。加えて両陛下はお帰りの砌、私と共に出席した同じく遺族の白井　貞の前に歩を留められ、親しくお声を掛けてくださいました。

ご下問の内容は、戦死した者が何時、何処でどんな状態で戦死したか、当時の戦況などかなり詳しくお聴きくださいました。特に兄が二十四歳の若さで亡くなった事と当時若年船員が沢山戦死したことを申し上げたことに心を痛められたご様子でした。最後に「遺族の皆様を大切にして下さい」とお心遣いくださり大変恐懼致しました。おそばで皇后陛下もうなずいて優しく御言葉を掛けてくださいましたが、紀宮様に「ご結婚お目出とうございます」と申し上げると会釈して微笑んでくださり、失礼ながら両陛下も親としての嬉しさが窺えました。

両陛下は、皇太子としての第一回慰霊祭のご出席を含め、第三十回記念式典への天皇皇后としての行幸啓で、観音崎の「戦没船員の碑」にお参り戴いたのは過去三回に及び今回で四回にも及んでおります。

両陛下・紀宮さまと、右から白井貞さん・堀田明道さん

ご承知の通り、この観音崎の戦没船員慰霊碑には戦没船員を想う天皇陛下の御製と皇后陛下の御歌が刻まれた石碑がございます。そして三十回の式典での天皇陛下の御言葉には「わが国の人々が戦後に築き挙げた平和と繁栄が戦没船員をはじめとする数しれない人々の尊い犠牲の上に達成されたものであることを決して忘れてはならない」と述べられ「これからもこの海の平和を守るために皆で努めていくことが大切であり、それが亡くなられた人々に報い、遺族の意にそう道であると思います」と御霊の安らかなことを祈られ、亡くなられた船員に真摯な御気持ちを述べられていることに、私ども遺族は、天皇家のさらなるご繁栄を祈るとともに深い感謝の気持ちを捧げたいと想います。

観音崎行幸啓・お成り奉迎
大いなる御心にふれる歓び

全国戦没・殉職船員遺族会
理事　白井　貞

新年おめでとうございます。去年の「戦没殉職船員遺族の集い」では、天皇皇后両陛下の御心にふれて、鮮烈な感激と深い歓びを賜りました。

ああ、六十年は長い、戦没者の妻は大正八年生まれが僅か二名に。兄や弟が戦没者の兄弟も昭和一桁生まれ。子供は八十、七十代。父を知らぬ六十代を最後とし、歳月は容赦ない。集いでは一期一会の思いがしました。

戦中と戦後十年は苦労しました。それだけに、ご聖慮の有難さが身にしみて、まして名もない民が故人の思い出話を、天皇皇后両陛下に隣り合って話せるなど夢のような世の中です。

天皇陛下とお話をする機会を何と私は再度得て恐縮致します。初めの話では一気に父の最後だけ述べましたが、天皇陛下は「あなたはどうしておられましたか」と慈愛の眼で訊かれます。驚いて、私は社会人になっていて東京大空襲は強制疎開で免れたこと。母と妹たちの話も簡潔に致しました。

天皇皇后両陛下、草の根の民、弱者の身の上に熱き思いを抱き行脚を続けられて畏れ多いことです。どの人も感動して、生きていて良かったと穏やかな安らぎを賜ります。

両陛下を先導する相浦会長（右）

次の行幸啓は、船員への並々ならぬ思し召しで行われると聴きました。

十月十一日、観音崎公園の「戦没船員の碑」に両陛下が紀宮様を伴って供花をあそばされました。

公園の入り口から相浦紀一郎日本殉職船員顕彰会会長の先導で天皇皇后両陛下、紀宮様が歩み始めると、あたりに清々しい緊張感がみなぎりました。

天皇陛下はサイパン島での日焼けが消えてご壮健なご様子と拝しました。

皇后陛下は秋らしい白い衣装がよく似合いその薫たけた美しさに一同は心を奪われました。続いて若さ一杯の紀宮様、その楚々とした風情、そして控えめで優雅なマナーに心が洗われて感嘆しました。

「戦没船員の碑」の前に次々に供花されお三方が揃って拝礼されました。

紀宮様には最後のご公務ではないでしょうか。両陛下の胸中はいかばかりと拝しながら胸が熱くなりました。

お見送りの席でお待ちしていますと、歌碑の前のご説明を終えられ皆様が降りて来られました。

天皇陛下が奉迎者にお声を掛けておられます。五番目の堀田明道全国戦没殉職船員遺族会会長のお話を拝聴していると私の番でして、陛下が「あなたのお父様は」と問われます。頭の中が真っ白になって「六十年前の昭和二十年一月に船長として亡くなりました。エリートではなく、北は樺太、カムチャッカ、いろいろな国へ、南極にまで行きました。（父は明治二十四年生）

十八年夏に家をたち、十九年秋以後は音信不通と稚拙な話を申しました。

陛下から、「お最後はどこですか」と促され「東シナ海の海南島作戦に参加しました。そのとき、機雷を発見し、急旋回（九十度）して助かり、こんな船長の下にいたら、命が幾つあっても足りない、と言われました。弾丸が肩を掠めて傷ついたこともあります。最後は揚子江（長江）の武漢、大治附近ですが、そこは機雷の巣のような処でして上級船員と共に船長らしく逝きました」と述べました。

陛下は丁寧に頭を下げて「大変なご最後だったのですね」と申しましたので、私は父を忍び胸が一杯でした。

皇后様が微笑されて会釈されますので、私も笑顔で一礼して紀宮様には「お幸せに」と会釈しました。

奉迎者の列を離れたお三方に一般席の方から「紀宮様、ご結婚おめでとうございます。お幸せに」というたくさんの人の声が沸きあがり、なんとも和やかに幕が下りました。あのお美しい笑顔を持つ宮様のご多幸を心からお祈りいたします。

天皇皇后両陛下の慰霊の旅は沖縄、サイパンと続き、戦没殉職船員のご供花で締めくくられました。感謝するばかり、忘れえぬ日でございました。

『海の日』記念清掃・献花

横須賀海洋少年団

梅雨明け前の七月十七日、神奈川県横須賀市観音崎公園内にある「戦没船員の碑」の清掃と献花が行われた。

当日は曇り空とは言え、三十度を越す暑さの中、横須賀海洋少年団の団員、団員OB、父母の会の二十五名と殉職船員顕彰会から臼居理事長・秦常務理事他事務局員四名の総員三十一名が参加した。

少年団員たちは慰霊碑に水をかけながら雑巾で力いっぱい拭いていた。同少年団のOB、父母の関係者も一緒になり、碑の付近も含めてきれいに清掃を行った。

掃除に一生懸命・海洋少年団員

終了後、慰霊碑の前に整列した少年団員の子供たちに対し、臼居理事長は清掃を一生懸命やってくれた事に感謝のことばを述べ「この碑は船員であった皆さんのお爺ちゃんほどの人達が、今から六十年も前に戦争のため船でなくなり、終戦後その船員さんたちの御霊を慰霊し、今後このような戦争が起こることなく、平和な海でありますようにとの願いがこめられています」と話した。

その後参加者全員で献花し、一連の作業を終了した。

少年団員の子供たちは、待ちに待った弁当の時間となり、それが楽しみとばかりにはしゃいでいた。秦常務理事より、おみやげもくばられた。

全作業を終え、心地よい汗をふきながら戦没船員の碑を後にした。

「個人情報の保護に関する方針」について

「個人情報の保護に関する法律」（平成十五年法律第五十七号）の一部が平成十七年四月一日に施行されたことに伴い、当顕彰会では保有する個人情報の保護に関して適性な取り扱いを図るため、次に掲げる「個人情報保護方針」に基づき、個人情報の保護に万全を期することに致しますので、今後とも当会の事業にご支援をお願い致します。

個人情報保護方針

財団法人日本殉職船員顕彰会は、戦没船員・殉職船員及びその遺族情報の重要性を認識し、個人情報の保護に関する法律をはじめ関係する法令等を遵守し、以下の取り組みを実施しています。

一、情報収集・利用目的

日本殉職船員顕彰会寄付行為、規則・規程に定められた目的と顕彰会活動を実施するため、戦没船員・殉職船員及びその遺族に関する必要最小限の情報を収集しています。

これらの個人情報は、本人確認や機関紙「潮騒」の発送、追悼式の案内等の目的に利用しています。

二、収集する情報の種類

戦没船員・殉職船員及びその遺族の住所、氏名、生年月日、性別、所属会社、職名、その他円滑な顕彰会活動に必要となる情報を収集しています。

三、情報の収集方法

戦没船員・殉職船員及びその遺族など関係者を経由して情報を収集しています。

四、情報の管理

日本殉職船員顕彰会では、個人情報の取扱いについて規定を定め、個人情報保護管理者等責任者の設置など管理体制を整備するとともに、個人情報への不正アクセス、紛失、改ざん及び漏えいなどの防止に努めています。

また、利用目的の達成に必要な範囲内において正確、最新なものにするように努めています。

なお、個人情報の処理を外部へ委託する場合には、漏えいや再提供を行わないよう契約により義務づけ、適切な管理を実施しています。

五、情報の開示

戦没船員・殉職船員及びその遺族ご自身の個人情報について開示を希望される場合は、本人確認できる物（運転免許証等）と印鑑をお持ちのうえ、顕彰会事務所へお越しください。その際に個人情報開示依頼書にご記入いただき、後日郵送いたします。事務所へのお越しが困難な場合は、顕彰会事務所までご連絡ください。住所確認のうえ個人情報開示依頼書を郵送いたします。

また、戦没船員・殉職船員が所属する会社からも情報収集を行っている関係上、所属会社から得た情報に関して所属会社から情報開示依頼があった場合については、情報を開示いたします。

物故船員慰霊祭に献花

昨年は、各地で行われた殉職船員慰霊祭、物故船員慰霊祭に会長名にて献花し御霊のご冥福を祈った。

○　七月　七日　横浜市、成田山横浜別院延命院、海の月間横浜地区実行委員会
「物故船員慰霊祭」（小祭）

○　七月十四日　北九州門司区、真光寺、北九州海の日協賛会
「殉職船員無縁塚慰霊祭」

○　七月十八日　神戸市、会下山公園、会下山ラジオ体操会
「海員萬霊塔慰霊のつどい」

○　八月二十日　小樽市、手宮公園、小樽船員ＯＢ会
「物故船員合同慰霊祭」

○　八月三十日　唐桑町、唐桑町海の殉難者慰霊碑保存会
「唐桑町海の殉難者慰霊祭」

○　十月二十一日　福岡市、西公園光雲神社、福岡海寿会
「以西底曳網漁船殉難者慰霊大祭」

○　十月二十八日　石川県能都町、久田船長顕彰会
「久田船長碑前祭」

北九州門司区・真光寺慰霊祭

ご寄付のお礼

平成十七年七月以降、次の方々からご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。（敬称略・順不同）

米山隆昭（東京都北区）
都竹利年雄（東京都杉並区）
錦戸輝子（愛媛県今治市）
宮田幸彦（兵庫県垂水区）
松下トシエ（熊本県熊本市）
財団法人　東京商船大学後援会
（東京都江東区）
榊原英之（高知県高知市海友会会長）
中上貞子（兵庫県飾磨郡家島町）
河内フサヱ（兵庫県神戸市）
野田浩男（兵庫県宝塚市）
梶原忠男（福岡県筑紫野市）
岩澤純造（神奈川県横浜市）
岩佐義一（東京都三鷹市）
伊藤春子（愛知県豊田市）
渡辺　諄（兵庫県神戸市）
駒野　由（千葉県千葉市）
増田篤彦（神奈川県三浦市）
三浦　巧（東京都東久留米市）
塩田顕一（東京都練馬区）

新加入会員ご紹介

当会の運営は、基本財産の利息収入、日本海事財団の補助金、主要海運会社や関係団体等よりの賛助会費によって慰霊、追悼事業を行っております。

しかし、利息の激減や海運会社合理化にともなう退会等によって厳しい運営を強いられております。

そのような中にあって、ご遺族や関係者のご協力をいただき、慰霊、追悼、援護事業をささえる協賛会員制度（年一口三千円）が設けられております。お願いできる場合は、郵便払込取扱票をお送りさせていただきます。

平成十七年七月以降、次の方々が賛助会員・協賛会員に加入されました。ここに厚く御礼申し上げます。

（敬称略・順不同）

◇賛助会員

秦　一生

（財）漁船海難遺児育英会

◇協賛会員

錦戸輝子、島田　研、藤井正美、今村春政、渡瀬雅子、根本靖子、栗田達雄、中村隆典、和田耕作、藤井栄子、山岸信一、田崎礼子、稲垣滋子、田島英雄、下町佳苗、谷本光代、渡辺國昭、堀本圭子、岩佐義一、坂下康雄、荒尾忠司、木原國夫、千葉器平、中村良秋、伊牟田泰弘、難波紀子、平井正明、塩田顕一、近藤治子、堀　桂子、高木　理、吉崎均、渡辺　諄、伊藤春子、大西茂雄、北内美穂子、武智弘忠、原田公子、水沼　清、山本貴美枝、太田敏子、奥村豊、松井昶子、柿崎祐子、二村嘉彦、佐渡妙子、亀井綽子、迫田秀一、三浦巧、嶋田早苗、江藤政雄、斎藤悦子、中野あい子、三谷暁美、加辺一夫、山崎絵里、加辺覚一郎、熊野利徳、武田晴美

お知らせ

役員・評議員の一部変更

十月二十一日の評議員会および同月二十四日の理事会において、当会の役員および評議員の一部が変更された。

［副会長］

新任　鈴木　邦雄
（社）日本船主協会会長

退任　草刈　隆郎　立石　信義
日本内航海運組合総連合会会長

［理事］

新任　西岡　喬
（社）日本造船工業会会長

中本　光夫
（社）日本船主協会理事長

豊島　達
（日本海事広報協会理事長）

退任　伊藤　源嗣
福島　義章
吉田　公一

［評議員］

新任　高橋　正夫
（社）海洋会専務理事

退任　長崎　定彦

終戦記念日の献花式

毎年執り行われている八月十五日「終戦記念日」の戦没船員追悼の行事は、昨年も当会の役職員および関係団体代表ら約三十人が参列し、正午から武道館において行われた政府主催の進行にあわせて、献花と黙祷を捧げた。

真夏の暑さは厳しく、参列者も汗を流しながらの献花式となった。

役職員・関係団体代表の献花と黙祷

遺児援護金の給付

今年度は四名増

殉職船員遺児援護金給付対象者は、本年新たに奉安される殉職船員の遺児四名が遺児選考委員会の審議を経て決定された。従来からの継続給付者を含め合計二十五名となった。

遺児援護金は、義務教育修了まで毎月一人八千円支給、入学祝金は小学校三万円、中学校一万円。

なお、新規に給付が決定された遺児は次の方々である。すこやかに成長してほしい。

◆殉職船員　佐藤　源一（南洋海運）
憲一くん　中学三年生

◆殉職船員　上田　定雄（南洋海運）
基樹くん　中学一年生

◆殉職船員　中野　秀利（興洋海運）
祥吾くん　中学二年生
真吾ちゃん小学四年生

保護者からのお便り

高知県室戸市　岡本　美紀

いつもありがとうございます。子供達は運動会も終わり、勉強にクラブ活動にがんばっています。

度会郡玉城町　大竹　初美

送金ありがとうございます。二学期も始まり早一ヶ月、毎日元気に学校へ通っています。先日は運動会があり、また、一年分の成長を感じさせられる一日でした。次女の保育所の運動会はもうすぐで、毎日練習頑張っています。

宮城県石巻市　阿部　悦子

いつも援助金をありがとうございます。子供達は病気もせずに元気にすごしています。中学生は新人戦（卓球部）で選手として出場するのでがんばっています。

小学生は学芸会の練習が始まり、覚えるのに一生懸命です。自転車もようやく一人で乗れるようになりました。これからもよろしくお願いします。

阿部さんご一家
左から江理華さん、憲資くん、沙也加さん

宮城県石巻市　高橋　弘子

いつもお世話様です。飛翔もようやく学校になれてきたところ夏休みにはいり、また入院いたしました。今回は神経の病で顔面神経になりました。幸い、半月ほどで退院できましたが、倭を一人にさみしい思いをさせてしまい心が痛みます。これから先の育児や生活に少し不安はありますが、頑張っていきます。倭はまだ水泳をがんばっています。この頃はよく食べるようになり太ってきました。

長崎県加津佐町　井川　育子

お彼岸も過ぎ朝夕めっきり涼しくなってきました。息子も中学三年です。まだ部活（陸上）をがんばってやっています。親としては、そろそろ受験に向かってがんばってほしいのですが……でも毎日楽しそうに学校に行っています。今後ともよろしくお願いします。

二人のお小遣いでお母さんへの誕生日プレゼント・花篭　高橋さんご兄弟

東京都千代田区麹町の日本殉職船員顕彰会事務所に常勤しているスタッフは四名です。それぞれが一言づつ自己紹介をすることに致しました。

相浦紀一郎会長

臼居勲理事長

齋藤清伍（常務理事）

昨年八月一日から、前任者の秦一生常務理事と交代し勤務しております。二十年余り船員として乗船の後、全日本海員組合、日本船員福利雇用促進センター勤務を経て当会にまいりました。趣味はスポーツ系、特にマラソン・ゴルフに熱が入っています。

顕彰会のような業務は初めてでございますが、皆様のご指導とご協力をいただき、努力してまいりたいと思っております。ご支援よろしくお願い致します。

富澤　英二（事務局長）

昨年四月一日から当顕彰会にお世話になっております。私、船員関係の仕事とはかけ離れた人事一筋四十年近く働いてきた者です。前任者同様可愛がってもらえるよう頑張っていきますので、宜しくお願いします。

常勤のスタッフ、前列左・齋藤常務、右・富澤事務局長
後列左・伊藤事務局次長、右・田中事務職員

伊藤　虔二（事務局次長）

気がついたら最古参になっていました。OA機器アレルギー症候群は慢性化し特効薬が見つかりません。それでも顕彰会のシーラカンスは周囲の暖かい保護法により生き延びています。よろしくお願いします。

田中佐代子（事務職員）

昨年一月から顕彰会事務局で働いています。現在は海のない埼玉県在住ですが、海が大好きです。海を愛し海に散った船員さんの慰霊に少しでもお役に立てればと思います。よろしくお願いします。

事務局より

今年の追悼式は五月十二日本年も諸般の事情により、五月十二日（金）に執り行いますので、お問違いのないようお願い致します。

なお、関係者へのご案内状は四月初めに発送致します。

◇　ご投稿お待ちしております。

本紙は皆様からのご投稿をお待ちしております。随想、感想、本紙を通じてのご遺族や関係者の交流など自由です。投稿は、字数に制限はありませんが、できれば千八百字程度にとりまとめ、関連の写真がございましたら同封いただければ幸いです。

なお、投稿は当方で若干修正させていただく場合もございますので、あらかじめご了承頂きたいと思います。

◇　昨年七月四日に開催された「遺族の集い」について、感想文やお礼のお手紙など五十通余りが寄せられました。

紙面の関係で今号の「潮騒」では一部をご紹介させていただきました。皆様の文章全部は掲載できませんでしたが、ご理解いただきます様お願い致します。

編集後記

☆編集スタッフが替わって初めての「潮騒」です。機関紙誌の編集は慣れないと中々うまくできないと言われますが、事務局員それぞれが工夫しながら、やっと締め切りに間に合って作れた「潮騒」です。

皆さんからお寄せいただく原稿が何よりの励みになります。

読まれる、親しまれる機関紙「潮騒」の制作に向け努力してまいります。編集は楽しく取り組んでいきたいと思っております。

（齋藤）